

漢点字 講習用 テキスト

初級編 第三回 (全十回)

横浜漢点字羽化の会
二〇〇四年五月二十日

目次

3	複合文字 (1)	
5.	漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (5)	1
※	「口」を部首として含む文字	1
	〈品 唱 単 和〉	
・	「合」と、それを部首として含む文字三つ	2
	〈合 給 拾 答〉	
・	「員」と、それを部首として含む文字一つ	4
	〈員 損〉	
・	「史」と、それを部首として含む文字一つ	5
	〈史 使〉	
・	「舌」と、それを部首として含む文字三つ	6
	〈舌 活 舎 話〉	
・	「口」を部首として含んでいて、漢点字の符号に反映されて いない文字一つ	7
	〈絹〉	
♪	愛唱歌 「汽笛一声」	8
	読みの練習 (10)	9
	書き取り問題 (10)	10
6.	漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (6)	12
	〈季〉	
※	「女」を部首として含む文字四つ	12
	〈委 好 姉 妹〉	
※	「田」を部首として含む文字四つ	13
	〈男 細 思 胃〉	
※	「由、曲」を部首として含む文字一ずつ	14
	〈油 典〉	
※	「心」が下に付く文字二つ	15
	〈悪 応〉	
※	「系」を部首として含む文字二つ	16
	〈係 孫〉	

♪♪愛唱歌 「花かげ」	17
読みの練習 (11)	18
書き取り問題 (11)	19
7. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (7)	21
〈泳 混 財 社 証 徒 道 貧 防 明〉	
※ 「車」を部首として含む文字二つ	24
〈庫 連〉	
※ 「更」と、それを部首として含む文字一つ	25
〈更 便〉	
※ 「能」と、それを部首として含む文字一つ	26
〈能 態〉	
♪♪♪愛唱歌 「おさるのかごや」	27
読みの練習 (12)	28
書き取り問題 (12)	30
4 基本文字 (3)	
比較文字	
1. 対、あるいはグループをなす比較文字 (1)	32
※ 「父」と「母」	32
※ 「上・中・下」	33
※ 「右」と「左」	35
※ 「大きい」と「小さい」	36
※ 「出る」と「入る」	37
近似文字	38
〈天 太 夫 片〉	
♪♪♪♪愛唱歌 「ロンドンデリーの歌」	39
読みの練習 (13)	40
書き取り問題 (13)	43
2. 対、あるいはグループをなす比較文字 (2)	45
※ 「高い」と「低い」	45
※ 「優・良・可」	46
※ 「東・西・南・北」	47
※ 「鶴」と「亀」	48
※ 「互」と「皆」	49
※ 「凸」と「凹」	49
近似文字	50
〈氏〉	
♪♪♪♪♪愛唱歌 「サンタ・ルチア」	51
読みの練習 (14)	52
書き取り問題 (14)	53
⊕ ティータイム 夏目漱石『心』冒頭より	55
【附】 これまでに出てきた漢点字一覧	56

3 複合文 (1)

5. 漢字および第1基文を部首とした文 (5)

※ 「口」を部首として含む文。

(77) 品 ヒン ホン しな

「口」を、上につ、下につ、角形につ並べた形の文です。「しな」と読んで、色々な「もの」をします。また、「ヒン」と読んで、物や物の等級や価値を表すがあります。この文を構成する「口」は、く中、祭祀で神様に捧げる液を容れた器を表しているといわれます。漢では、がつの「森」と同様に、「(口)」と「(つ)」で表されます。

「質」「種」「格」「物」

「納」「上」「骨柄」「物」「揃え」

(78) 唱 ショウ とな-える うた-う うた

「口偏」の右側に「日」を縦につ並べた形の文です。右側の部は、は「をそろえてう」というを持った文でしたが、現では、別のに用いられています。そのために「口」を偏に付けて、そのを表すようになりました。「となえる」と読んで、にんじてものをう、「うたう」と読んで、節を付けてうたうことを表します。漢では、「(口偏)」と「(日)」で表されます。

* 右側の「日」を縦に並べた文「昌」、「ショウ、まさ」は、中級編でご紹介します。

「和」「歌」「詠」「合」

「独」「輪」

したフタを、びたりと𠄎𠄎じ合わせた形です。そこから、“あう” “あわせる” という𠄎𠄎𠄎𠄎が生じました。ものともものがびたりと“あう”、気持ちや𠄎が“あう”、と用いられます。また、ものを“あつめる”、人が“あつまる”という𠄎𠄎𠄎𠄎にも用いられます。さらに、容量の𠄎𠄎位として、𠄎𠄎升の𠄎𠄎の𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎に、また、高い山を𠄎等𠄎して、その高さの𠄎𠄎𠄎𠄎としても用いられます。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎」で𠄎𠄎角の屋根の形を、「𠄎」で、「口𠄎」を表しています。

* “あう”と読む文𠄎𠄎は沢山あります。前𠄎𠄎𠄎𠄎出て𠄎𠄎た「会𠄎𠄎」とこの「合𠄎𠄎」の用いられ𠄎の違いにご注𠄎下さい。大まかに、前者は「𠄎にあう」、後者は、「ものがびたりとあう」と用いられます。

「𠄎𠄎格」 「𠄎𠄎理」 「𠄎𠄎同」 「総𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」
 「集𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎際連𠄎𠄎」 「𠄎𠄎働組𠄎𠄎」

(82) 給𠄎𠄎 キュウ コウ たま-う たまわ-る たま-え
 た-す あた-える

「糸𠄎偏」の右側に「合𠄎𠄎」を置いた文𠄎𠄎です。布地の欠けたところを𠄎𠄎ぐに補うという𠄎𠄎𠄎𠄎を表しています。欠けたところを補う、𠄎𠄎要なものを与える、𠄎下の者へ与えるなどの𠄎𠄎𠄎𠄎があります。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎(糸偏)」と「𠄎(合𠄎𠄎)」で表されます。

「𠄎𠄎与」 「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎仕」 「𠄎𠄎餌」
 「支𠄎𠄎」 「補𠄎𠄎」 「俸𠄎𠄎」

(83) 拾𠄎𠄎 シュウ ひろ-う

「手𠄎偏」の右側に「合𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。𠄎で掻き集めることを表す文𠄎𠄎で、そこから“ひろう”という𠄎𠄎𠄎𠄎が生じました。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎(手偏)」と「𠄎(合𠄎𠄎)」で表されます。

「𠄎𠄎得物」 「𠄎𠄎遺集」 「落ち穂𠄎𠄎い」 「𠄎𠄎い物」

(84) 答(𠄎𠄎𠄎) トウ こたえ こた-える

「竹(𦵑)」の下に「合(𠄎𠄎)」を置いた形の文(𠄎𠄎)です。𠄎𠄎でできたフタが、容器にぴたりと𠄎𠄎𠄎𠄎していることを表していること𠄎𠄎わられます。そこから、𠄎𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎𠄎いに対する“こたえ”の𠄎𠄎𠄎𠄎が生じました。𠄎𠄎𠄎𠄎に対する返事、質(𠄎𠄎)に対する答え、𠄎𠄎算や𠄎𠄎題の答えを𠄎𠄎𠄎𠄎します。漢(𠄎𠄎𠄎𠄎)では、「𠄎(竹冠)」と「𠄎(合𠄎𠄎)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「解(𠄎𠄎)」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「応(𠄎𠄎)」
「返(𠄎𠄎)」 「ご名(𠄎𠄎)」

・「員(𠄎𠄎)」と、それを部(𠄎𠄎)として含む文(𠄎𠄎𠄎𠄎)つ。

(85) 員(𠄎𠄎) イン エン

「口(𠄎)」の下に「貝(𠄎)」の置かれた形の文(𠄎𠄎)です。𠄎𠄎は、カナエの周りを𠄎𠄎く取り𠄎𠄎んだ形から始まったもので、“まるい”という𠄎𠄎𠄎𠄎が含まれています。現(𠄎𠄎)では、𠄎の𠄎、ある枠内にいる𠄎という𠄎𠄎𠄎𠄎で用いられます。また、𠄎𠄎定の幅の𠄎𠄎𠄎𠄎も表します。漢(𠄎𠄎𠄎𠄎)では上下を逆にして、「𠄎(貝)」と「𠄎(口)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「社(𠄎𠄎)」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」
「定(𠄎𠄎)」 「団(𠄎𠄎)」 「乗(𠄎𠄎)」 「復(𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎)」 「幅(𠄎𠄎)」

(86) 損(𠄎𠄎) ソン そこ-なう そこ-ねる

「手(𠄎𠄎偏)」の右側に「員(𠄎𠄎)」を置いた形の文(𠄎𠄎)です。「員(𠄎𠄎)」は、𠄎𠄎い形を𠄎𠄎𠄎𠄎して、𠄎𠄎い𠄎𠄎を表します。そこから、ものがなくなる、失われるの𠄎𠄎𠄎𠄎が生じました。漢(𠄎𠄎𠄎𠄎)では、「𠄎(手偏)」と「𠄎(員)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎失」 「𠄎𠄎𠄎害」 「𠄎𠄎𠄎益」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」
「𠄎𠄎𠄎傷」 「破(𠄎𠄎)」 「欠(𠄎𠄎)」 「大(𠄎𠄎)」

・「史𠄎𠄎」と、それを部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎𠄎𠄎つ。

(87) 史𠄎𠄎 シ ふびと ふみ

横長の「口𠄎」に「人𠄎」に似た𠄎𠄎の上の縦の線を重ねた形の文𠄎𠄎です。ただし、「人𠄎」に似た𠄎𠄎とは、右側の斜めの線が左側の斜めの線と、交差した形をしています。この横長の「口𠄎」は、𠄎の札を束ねて納める容器で、「人𠄎」の𠄎𠄎に似た形は、それを持っている𠄎を表しています。この文𠄎𠄎は、「ふびと」と訓読みしますが、天𠄎の側で、コヨミを作ったり、天文による占いを𠄎った官吏のことです。昔は、農業が生産の大部𠄎を占めていたので、自𠄎𠄎の運𠄎を𠄎𠄎定めることが、政治の中𠄎だったからです。時代が下って、「ふみ」と読むのは、歴史書のことを指します。中𠄎𠄎では、𠄎𠄎つの王𠄎𠄎の歴史書を編むことが、その𠄎𠄎にとって、最も大きな事業でした。「ふびと」は、その編纂にも当たりました。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎(口)」と「𠄎(人)」で表されます。「人𠄎」に似た形を、「人𠄎」で表しました。

「𠄎𠄎記」 「歴𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」

(88) 使𠄎𠄎 シ つか-う つか-い し-む せし-む

「人𠄎偏」の右側に「史𠄎𠄎」の上の部𠄎に横線を交差させた形の文𠄎𠄎です。右側は、「史𠄎𠄎」と同様の𠄎𠄎𠄎𠄎の文𠄎𠄎で、役𠄎を表します。天𠄎のツカイのことから、ものを使う、使いにやる、何かをさせる、という𠄎𠄎𠄎𠄎になりました。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎(人偏)」と「𠄎(史に横線を交差させた形)」で表されます。「𠄎」は、第𠄎𠄎𠄎偏です。

* 「使𠄎𠄎」の旁は、「吏𠄎𠄎」で、「リ」と音読する文𠄎𠄎です。𠄎𠄎𠄎𠄎は、「史𠄎𠄎」と同様、役𠄎のことで、「官吏、吏𠄎𠄎」と用いられます。詳細は中級編でご紹𠄎𠄎します。

「𠄎𠄎用」 「𠄎𠄎役」 「大𠄎𠄎」 「遣唐𠄎𠄎」

「天𠄎𠄎」 「𠄎𠄎い𠄎り」 「お𠄎𠄎い物」

・「舌」舌と、それを部部として含む文文つ。

(89) 舌舌 ゼツ した

漢漢の「干」干の下に「口」口を置いた形の文文です。この「干」干は、干ではありません。干の形をしていますが、干は、「干の中で動くもの」という干を表します。干の中で動くもの、そのシタから干せられる干、シタの形をしたもの等々の干があります。漢漢では上下が逆になって、「干 (口)」と「干 (干)」で表されます。

「干鋒」 「干弁」 「干毒」 「干長広」
 「干滑」 「干竜蘭」 「干鼓」 「干舐り」
 「干寸」 「干枚」

(90) 活活 カツ い-きる い-かす
 い-ける く-らす

「さんずい」さんずいの右側に「舌」舌を置いた形の文文です。この「舌」舌は、舌は「した」とは別舌でしたが、現舌では同じ形が舌用されています。生き生きと動き舌る様舌、舌の生活する姿を表す文文です。漢漢では、「舌 (さんずい)」と「舌 (舌)」で表されます。

「舌動」 「舌」 「舌」 「舌氣」
 「舌山」 「舌魚」 「舌生」 「舌自」
 「舌快」 「舌復」 「舌け舌」 「舌け作り」

(91) 舍舍 シャ やど いえ やど-る やど-す

舍角の屋根の形の下に「土」土、その下に「口」口を置いた形の文文です。舍足をゆったりと伸ばしてくつろげる舍、舍みするためのヤドを舍します。この文文の旧舍「舍」は、舍角の屋根の下に「舌」舌に似た舌を置いた形の文文です。漢漢ではその旧舍の形に倣って、「舍 (舍角屋根)」

旧字 「舍」

と「舌」で表されます。

「監」 「館」 「寄」 「官」
「兵」 「厩」

(92) 話 ワ はな - す はなし

「言偏」の右側に「舌」を置いた形の文です。「舌」は、シタとは別でしたが、現では同じ形です。をいてはなす、勢い付いてはなす、はなしをする、物をはなす、あるいは般を指す文です。漢では、「言偏」と「舌」で表されます。

「術」 「題」 「術」 「術」 「術」
「神」 「民」 「術」 「寓」 「逸」
「し上」 「し好き」 「昔」 「夜」

・「口」を部として含んでいて、漢の符号に反映されていない文つ。

(93) 絹 ケン きぬ

左側に「糸偏」、右側に、上に「口」、下に「月」を置いた形の文です。蚕の繭から取ったのことです。右側の「口」は、い形の繭を象ったもので、その下の「月」は「肉」、つまり繭の中にいるサナギを表しています。漢では、「糸」と「月」で表されます。「口」は省略されます。

「絹」 「布」 「絹」 「絹」
「生」 「練」 「織物」

♪ 愛 歌 ♪

鉄道 歌

作 詞 大 建樹
作 多 梅稚

汽笛 声新橋を はや我汽は離れたり
愛宕の山に入りあたごのこる を旅路の友として

右は高輪泉岳寺たかなわせんがくじ 土の墓どころ
雪は消えても消えのこる 名は載の後までも

窓より近く 川の 台場も えて波白き
海のあなたにうすがすむ 山は上総かぜきか房州ぼうしゅうか

梅に名をえし大 を すぐれば も川崎の
大師河原だいしがわらは程ちかし 急げや電気の道すぐに

鶴 神奈川あとにして ゆけば横浜ステーション
湊を れば 舟の 煙は空をこがすまで

※ 地理教育の 歌として明治32年に第1集、東海道編が 表されました。新橋から神 まで、66番まであります。

読みの練習 (10)

- (1) 〃〃〃は〃〃種改良を続けて〃〃ました。
- (2) 〃〃物の優劣を決めることを〃〃定めという。
- (3) ベートーベンの第〃〃は混声〃〃部〃〃〃〃〃〃です。
- (4) 念仏を〃〃えて歩く坊さんがいた。
- (5) 〃〃純に考える〃〃がいいんだよ。
- (6) 〃〃物とは裏地のない着物のことです。
- (7) 〃〃厚い英〃〃辞典だねえ。
- (8) 〃〃々は平〃〃を〃〃から望んでいる。
- (9) あの〃〃が〃〃ると〃〃の空気が〃〃らぎます。
- (10) みんな、〃〃やかな顔ですね。
- (11) 酢〃〃噌〃〃えを作ろうか。
- (12) 〃〃〃〃〃額がぴたりと〃〃う。
- (13) 夏の〃〃〃〃が楽しみです。
- (14) 服を〃〃に〃〃わせるのか、〃〃を服に〃〃わせるのか…。
- (15) 需要と供〃〃の関係が価格を決める。
- (16) うるさい、君は黙り〃〃え。
- (17) 〃〃〃〃〃〃〃〃〃円確かに預かりました。
- (18) これじゃあ収〃〃がつかないでしょう。
- (19) わーい、良い物〃〃ったよ。
- (20) この〃〃題の解〃〃はこれだ。
- (21) ねえ、〃〃え教えてよ。
- (22) しっかりと理〃〃を〃〃えなさい。
- (23) 満〃〃電〃〃に乗ったので疲れしました。
- (24) これから委〃〃〃〃〃〃を〃〃きます。

- (25) 骨折り 骨のくたびれもうけ。
- (26) 多額の 損害賠償を請求する。
- (27) 展覧 展覧会になった。
- (28) 彼の機嫌を ねないようにね。
- (29) 昔から歴 歴は繰り返すと ばれる。
- (30) 天 天が空から舞い降りるといふ。
- (31) 母は近くへ 寸おきに きました。
- (32) 弁 弁さわやかに ます。
- (33) 枚 枚の は嫌われる。
- (34) 何しろ生 生がかかっていますからね。
- (35) 料の を かけた料理。
- (36) いけすの魚を け魚（うお）といふ。
- (37) い校 校には 不思議がよくあつた。
- (38) 彼とは大いに はずんだ。
- (39) 講師が した興 深い。
- (40) レーヨン を で えば です。
- (41) は蚕の繭から取ります。

書き取り 題 (10)

- (1) あのひとはじょうひんできひんもある。
- (2) どうきょうのしながわえきに行く。
- (3) 「ふるさと」というきよくは、しょうがくしょうかです。
- (4) そんなことはかんたんにできるよ。
- (5) きものには、ひとえとあわせがある。

- (6) わかいをするためのはなしあい。
- (7) わしつは、きもちをやわらげるなあ。
- (8) わたしは、ごまあえがだいすきです。
- (9) そのひは、つごうがつかずやすみます。
- (10) ちょうそんがっぺいはやっている。
- (11) このさい、きもちをあわせていかないと…。
- (12) このくつはあしにびたりとあうよ。
- (13) きゅうりょうびがたのしみでたのしみで…。
- (14) もういいからかえりたまえ。
- (15) ひろったもののことを、しゅうとくぶつという。
- (16) こどもは、いちじずつひろいよみをします。
- (17) もはんかいとうしゅうをかってきたよ。
- (18) このパズルのこたえをおしえて。
- (19) そのしつもんにかたえることはむずかしい。
- (20) じむいんをずいぶんへらしました。
- (21) そんとくかんじょうをする。
- (22) ひとのいのちをそこなう。
- (23) あいてのきもちをそこねないようにね。
- (24) せかいしもにほんしもすきだ。
- (25) こういしつは、しょうちゅうです。
- (26) パソコンをじゅうじざいにつかいこなす。
- (27) おかねのつかいみちをはっきりとさせなさい。
- (28) こりゃあ、しかつもんだいですよ。
- (29) すばらしいはなをいける。
- (30) いままでにまなんだちしきをいかす。
- (31) きしゆくしゃにはいるひとはすくないでしょう。
- (32) でんわで、いまわだいのことをはなしあう。
- (33) いろりのまわりでおはなしをきく。
- (34) そのわけをはなしてやろうか。
- (35) きぬおりもののでざわりがすきなのです。
- (36) しょうけんのきものはこうかだ。

* * * * *

3 複合文 (1)

6. 漢 および第基文を部とした文 (6)

(94) 季 キ すえ

「禾」の下に「子」を置いた形の文です。穀物の実りを表す文です。年をにつけて、「春・夏・・冬」といいますが、これらを総称して「季節」と呼びます。また「すえ」と読んで、この「季節」の最後のを表します。漢では、「(禾)」と「(子)」で表されます。

「節」 「題」 「春」
「」 「」

※「女」を部として含む文つ。

(95) 委 イ ゆだ-ねる まか-せる

「禾」の下に「女」を置いた形の文です。「禾」は、稲の穂が垂れた形を表している部で、下の「女」とともに、柔らかくたおやかにがっていることを表しています。「ゆだねる・まかせる」と読んで、に預けて任せきるを表します。漢では、「(禾)」と「(女)」で表されます。

「任」 「嘱」 「讓」

(96) 好 コウ この-む す-く よ-い

「女偏」の右側に「子」を置いた形の文です。が子供を大事に慈しむ様を表す文とわれます。「このむ」と読んで趣や好みのとして、「すく」と読んで、愛情表現に用いられます。また、「よい」と読んで、好ましいもの、よいもののをも表します。漢では、「(子)」と「(女)」で表されて、左右が逆になっています。

「運」 「悪」 「敵」

「𠂔𠂔𠂔𠂔き𠂔𠂔𠂔み」 「𠂔𠂔𠂔𠂔き嫌い」

(97) 姉𠂔𠂔𠂔𠂔 シ あね

「女𠂔𠂔偏」の右側に「市𠂔𠂔」を置いた形の文𠂔𠂔𠂔𠂔です。𠂔𠂔𠂔𠂔弟姉妹のうち、年長の𠂔𠂔𠂔𠂔を指します。また、年長の𠂔𠂔𠂔𠂔を敬愛して呼ぶ𠂔𠂔でもあります。漢𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔𠂔(女)」と「𠂔𠂔(市)」で表されます。

「𠂔𠂔𠂔𠂔弟𠂔𠂔𠂔𠂔妹」 「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」 「𠂔𠂔𠂔𠂔さん」

(98) 妹𠂔𠂔𠂔𠂔 マイ いもうと

「女𠂔𠂔偏」の右側に「未𠂔𠂔𠂔」を置いた形の文𠂔𠂔𠂔𠂔です。「未𠂔𠂔𠂔」は、まだ伸びきっていない𠂔𠂔の枝を表しています。𠂔𠂔𠂔𠂔弟𠂔𠂔𠂔𠂔妹のうち、年少の𠂔𠂔𠂔𠂔を𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔します。また、年少の𠂔𠂔𠂔𠂔や妻を慈しむ𠂔𠂔としても用いられます。漢𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔𠂔(女)」と「𠂔𠂔(未)」で表されますが、「𠂔𠂔」は「未」に当たりますので、𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔は「𠂔𠂔」としなければなりません。しかし、「𠂔𠂔」を採用しますと、他の文𠂔𠂔𠂔𠂔と重なりますので、このようになりました。

「𠂔𠂔𠂔𠂔弟𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」 「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」 「𠂔𠂔𠂔𠂔御」

※「田𠂔𠂔」を部𠂔𠂔𠂔として含む文𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔つ。

* 「田𠂔𠂔」は、既に出て𠂔𠂔𠂔た「畑𠂔𠂔𠂔」のように、𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔𠂔𠂔を表す場𠂔𠂔𠂔と、「果𠂔𠂔𠂔」のように、𠂔𠂔𠂔𠂔とは関わりのない、別の𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔を表す場𠂔𠂔𠂔があります。後者は、中に沢山詰まっているもの、ものが沢山集まっている様𠂔𠂔を表します。

(99) 男𠂔𠂔𠂔𠂔 ダン ナン おとこ

「田𠂔𠂔」の下に「力𠂔𠂔」を置いた形の文𠂔𠂔𠂔𠂔です。𠂔𠂔𠂔𠂔で𠂔𠂔をふるって働く、𠂔𠂔強い男𠂔𠂔を表しています。漢𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔𠂔(田)」と「𠂔𠂔(力)」で表されます。

「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」 「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」 「長𠂔𠂔𠂔𠂔」 「次𠂔𠂔𠂔𠂔」

「さんずい」の右側に「由」を置いた形の文です。「由」は、のい壺を象った文で、「油」は、そのからたらたらと流れ出す液を表しています。たらたらと流れ出ることから、液の“あぶら”のに用いられるようになりました。漢では、「(由)」と「(さんずい)」で表されます。左右が逆になって、さらに第さんずいを採用しました。

「」 「井」 「脂」 「塗料」 「」
 「醬」 「機械」 「椿」 「鬢付け」

(104) 典 テン のり

「曲」の下に「八」を置いた形の文です。「曲」の形は、代の中で作られていた簡を束ねた書物を象っていて、厚い、重厚な書物をしています。下の「八」の形は、その書物を載せている台です。典の教え、基準となる原則を表す文です。漢では、「(八)」と「(八)」で表されます。

「型」 「扱」 「辞」 「式」 「楽」

※「心」が下に付く文つ。

* これまでに、「想・恋・思」と、「心」が下に付く文がつ出てました。このように下に付く「心」を、“下”と呼びます。立偏と同様に、の働きを表す文です。

(105) 悪 アク オ わる-い にく-む わる

「亜」の下に「心」が置かれた形の文です。「亜」は、下に押し下げられた形を表していて、ここでは「心」を押さえつけられた形、欲求不満な気持ちを表す文です。そこから“わるい、にくむ”というが生じました。また、漢文を読み下した場合、“いづくにか”と読んで、“どこに？”と疑の副詞に、“いづくんぞ”と読んで、“どうして？”と、

(108) 孫^ニニ^ニ ソン まご

「子^ニ」の右側に「系^ニ」を置いた形の文^ニニ^ニです。血の繋がった^ニ孫を^ニニ^ニニ^ニしますが、^ニニ^ニ般には^ニニ^ニ代下った^ニ孫を^ニい^ニます。部^ニニ^ニの「系^ニ」は、その繋がりを表しています。漢^ニニ^ニニ^ニでは、「^ニ (子)」と「^ニ (系)」で表されます。

「^ニニ^ニニ^ニ」 「^ニ曾^ニニ^ニ」

♪♪ 愛^ニニ^ニ 歌 ♪♪

^ニニ^ニ かげ

作 詞 大村 主^ニニ^ニ
作^ニニ^ニ 豊^ニニ^ニ 義^ニニ^ニ

- 1 ^ニニ^ニニ^ニ夜お^ニさま ひとりぼち
さくら吹雪の ^ニニ^ニかげに
^ニニ^ニ嫁姿の お^ニニ^ニさま
^ニニ^ニにゆられて ^ニニ^ニきました
- 2 ^ニニ^ニニ^ニ夜お^ニさま ^ニニ^ニてたでしょう
さくら吹雪の ^ニニ^ニかげに
^ニニ^ニ嫁姿の ^ニニ^ニさまと
お別れおしんで 泣きました
- 3 ^ニニ^ニニ^ニ夜お^ニさま ひとりぼち
さくら吹雪の ^ニニ^ニかげに
遠いお里の お^ニニ^ニさま
^ニニ^ニはひとりに なりました

※ ^ニニ^ニの歌詞では、^ニニ^ニは^ニニ^ニ偏に^ニニ^ニの漢^ニニ^ニ (俚^ニニ^ニニ^ニ) で書かれていたようです。「俚^ニニ^ニニ^ニ」は、^ニニ^ニニ^ニのことです。

読みの練習 (11)

- (1) 日本には和歌を歌った名人がたくさんあります。
- (2) 急いで電話をかけた。
- (3) あの日にみんなねましよう。
- (4) おいできたのは日本でした。
- (5) この日本は日本のみではありません。
- (6) 日本、日本、大日本よ。
- (7) 夫や妻の日本、日本の妻は義理です。
- (8) この踊りは、軽く日本さんかぶりをします。
- (9) ぼくには弟がいませんでした。
- (10) その日本は大変に賢かったです。
- (11) 日本平等の精神が大切。
- (12) 長日本と次日本は今東京にいます。
- (13) 日本に生まれて日本をした気だな。
- (14) 生物の日本は日本胞でできている。
- (15) 身も日本る日本いです。
- (16) 日本かいことにくよくよしないのが長生きのコツ。
- (17) 彼の確かな日本を確認しよう。
- (18) 日本いあまって日本日本に日本く。
- (19) 日本と腸の日本に日本があります。
- (20) 現代は日本炭より日本の時代です。
- (21) 日本揚げは豆腐から作ります。
- (22) クイズを解くのに日本辞書をよく日本います。
- (23) 日本日本があつてしたことはありません。
- (24) 日本中に日本感が日本った。

- (25) 𠄎𠄎𠄎いいたずらっ𠄎𠄎𠄎だなあ。
- (26) 弟は𠄎𠄎𠄎援団の団長でした。
- (27) 息𠄎𠄎𠄎は期待に𠄎𠄎𠄎えてくれました。
- (28) 𠄎𠄎𠄎には関𠄎𠄎𠄎ないことですが…。
- (29) 𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎にお𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎き下さい。
- (30) 𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎の繁𠄎𠄎𠄎𠄎を願った昔。
- (31) 𠄎𠄎𠄎は我が𠄎𠄎𠄎より可愛いそうです。

書き取り 𠄎𠄎𠄎題 (11)

- (1) はいくには、かならず「きご」をいれます。
- (2) いさいしょうちしました。
- (3) せきになはゆだねられたひとにある。
- (4) かれらはこうてきしゆです。
- (5) かのじよはこのましいひとでした。
- (6) あには、ロックがすきなんですよ。
- (7) よになしまいとしようせつみたいで、すばらしい。
- (8) あねさんにようぼうはしっかりしている。
- (9) ああ、あのこはわたしのじつまいですよ。
- (10) わたしは、いもうとといまでもなかがいい。
- (11) だんしとじよしをさべつしてはいけません。
- (12) かつて、じなんはいえをだされてしまった。
- (13) いぜんマラソンは、おとこだけのきょうぎでした。
- (14) いがくはさいぶんかされすぎてもこまるのです。
- (15) きぬいとと、もめんいとではどちらがほそいか。
- (16) こまかいこころづかいがうれしい。
- (17) しそうしんじょうはじゆうである。
- (18) おもいおこせばさんねんまえ…。
- (19) いちょうのじょうぶなひとがうらやましい。
- (20) きはつゆとは、ベンジンのことです。
- (21) あぶらがみをはったかさをしってますか。

- (22) こてんをあさよむのがすきです。
- (23) あくうんがつよいひとはいるものだ。
- (24) このえいがには、けんおかんをかんじます。
- (25) わるがしこいのはきらわれる。
- (26) おうきゅうてあてをしておきます。
- (27) げきれいにこたえる。
- (28) わたしのけいるいをおおしえします。
- (29) がっこうではどんなかかりをしましたか？
- (30) ひまごのことをそうそんという。
- (31) わしには、そとまごとうちまごがいる。

* * * * *

3 複合文 (1)

7. 漢字および第1基文字を部首とした文 (7)

この文が、初級編の「漢字および第1基文字を部首とした文」の最後です。

(109) 泳 エイ およぐ

「さんずい」の右側に「永」を置いた形の文です。の中をおよぐことを表す文です。部の「永」は、長くの中をおよぐことと、「エイ」という音を表します。漢字では、「(さんずい)」と「(永)」で表されます。

「」 「法」 「遠」 「立ちぎ」

(110) 混 コン まざる まじる まぜる

「さんずい」の右側に「昆」を置いた形の文です。ものが入り混じる様、入り混じって区別がつかない様を表します。部の「昆」は、「むらがる、まとまる」のの文です。漢字では、「(さんずい)」と「(昆)」で表されます。

* 「昆」は、「日」の下に「比」を置いた形の文です。「昆虫、昆布」などと用いられます。詳は中級に譲ります。

「雑」 「乱」 「迷」 「同」

(111) 財 ザイ サイ たから

「貝」の右側に「才」を置いた形の文です。「貝」は、幣に用いられていたのことで、幣や財産を表します。「才」は、切り盛りすることをして、幣をうまく生ずることも表します。また、社の経済の部のにも用いられます。漢字では、「(貝)」と「(才)」で表されます。

「歩」 「空拳」 「無為」 「生」
「御町」 「歩く」

(115) 道 ドウ トウ みち

「首」に「しんによう」をえた形の文です。「しんによう」は、ものの動く様を表す部で、ここでは、々がくみちをします。「みち」は、実際にがき交いをするところでもあり、そこからのいの基準、道德のが生じました。また、教、術、武、能などの流れを指すとしても用いられます。漢では、「(しんによう)」と「(首)」で表されます。

「路」 「徳」 「教」 「街」 「北海」
「神」 「柔」 「剣」 「茶」 「華」
「獣」

(116) 貧 ヒン ビン まず - しい

「分」の下に「貝」を置いた形の文です。「貝」は、産や幣を表していて、「分」はそれをけて費やす様を表しています。「まずしい」と読んで、銭やの乏しいを指します。また、能やの乏しい様をも表します。さらに、ものの少なくなった状態のにも用いられます。漢では、「(分)」と「(貝)」で表されます。

「窮」 「乏」 「血」 「清」
「救」

(117) 防 ボウ ふせ - ぐ

「こざと偏」の右側に「方」を置いた形の文です。「方」は、左右に張り出した形を表していて、襲って敵や、氾濫するを堰きめるを表しています。「こざと偏」は、を盛った形を象っていて、これも「方」と同様のを表します。漢では、「(こざと偏)」と「(方)」で表さ

よいの「𠄎𠄎𠄎𠄎」に、「郵便、航空便」と用いて「たより」の「𠄎𠄎𠄎𠄎」に、また、船や航空機の運航をも表します。さらに、「𠄎𠄎𠄎𠄎」の新陳代謝、排泄の「𠄎𠄎𠄎𠄎」にも用いられます。漢「𠄎𠄎𠄎𠄎」では、「𠄎 (人偏)」と「𠄎 (更)」で表されます。人偏は、第「𠄎𠄎𠄎𠄎」偏を採用しました。

「𠄎𠄎𠄎利」「𠄎𠄎𠄎宜」「郵𠄎𠄎𠄎」「航空𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎箋」
 「船𠄎𠄎𠄎」「風の𠄎𠄎𠄎り」

※「能𠄎𠄎𠄎」とそれを部𠄎𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎𠄎𠄎つ。

(1 2 3) 能𠄎𠄎𠄎 ノウ あた-う よ-い

左側はカタカナの「ム」の下に「月𠄎𠄎」、右側には、縦にカタカナの「ヒ」が「𠄎𠄎」つ置かれた形の文𠄎𠄎𠄎𠄎です。「月𠄎𠄎」は「肉𠄎𠄎」で、カタカナの「ム」の形と「𠄎𠄎」緒に、粘り強い𠄎𠄎を「𠄎𠄎𠄎𠄎」しています。「あたう、よい」と読んで、能𠄎𠄎がある、成し遂げる𠄎𠄎がある、その𠄎𠄎を持った𠄎𠄎を表します。また、「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」能の「能樂」のことであります。漢「𠄎𠄎𠄎𠄎」では、「𠄎 (月)」と「ノウ」の音の「𠄎 (ノ)」で表されます。右側の部𠄎𠄎𠄎は、𠄎𠄎を象ったものですが、「𠄎𠄎𠄎𠄎」の部𠄎𠄎𠄎符号は、他に用いられないことから、作られませんでした。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎筆」「𠄎𠄎𠄎弁」「𠄎𠄎𠄎樂」「𠄎𠄎𠄎率」
 「可𠄎𠄎𠄎𠄎」「機𠄎𠄎𠄎的」

(1 2 4) 態𠄎𠄎𠄎 タイ すがた わざ-と

「能𠄎𠄎𠄎」の下に「心𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎𠄎𠄎です。「能𠄎𠄎𠄎」は、成し得るだけの𠄎𠄎のあることを表す文𠄎𠄎𠄎𠄎です。それに「心𠄎𠄎」を「𠄎𠄎」えて、「そのようにできる」という、「𠄎𠄎」構えや「すがた」という「𠄎𠄎𠄎𠄎」を表します。さらに「わざと、ことさらに」と、上辺をつくろうという「𠄎𠄎𠄎𠄎」にも用いられます。漢「𠄎𠄎𠄎𠄎」では、「𠄎 (能)」と「𠄎 (心)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎度」「𠄎𠄎𠄎勢」「状𠄎𠄎𠄎」「動𠄎𠄎𠄎」

♪♪♪ 愛 :::: 歌 ♪♪♪

おさるのかごや

作詞 山上 武夫

作:::: ^{かいぬま}海沼 実

エッサ エッサ エッサホイ サッサ
おさるの かごやだ ホイサッサ
:::喜れの山:::: ::::い::::
小:::原ちょうちん ぶらさげて
* ソレ ヤットコ ドッコイ ホイサッサ
ホーイ ホイホイ ホイサッサ

エッサ エッサ エッサホイ サッサ
:::の:::: (このは) の わらじで ホイサッサ
お客は おしゃれの こんぎつね
つんと すまして 乗っている
(* くりかえし)

エッサ エッサ エッサホイ サッサ
:::気な かごやだ ホイサッサ
すべっちゃいけない ::::橋
そらそら小:::だ つまづくな
(* くりかえし)

エッサ エッサ エッサホイ サッサ
のぼって くだって ホイサッサ
ちらちら あかりは ::::えるけど
向うのお山は まだ遠い
(* くりかえし)

※ 作詞者・作::::者ともに長野県出身で、「おさるのかごや」
はふるさとの山を::::いながら作ったと:::われています。

読みの練習 (12)

- (1) 大得は得です。
- (2) ぎはまるでだめ、植なんです。
- (3) 今や、は迷の時代です。
- (4) の中にがじると立ちます。
- (5) 全料をボールの中でかきぜます。
- (6) 産はほとんど持っていませんでした。
- (7) 布は小銭がいっぱいで重い。
- (8) のの長にいにく。
- (9) 神はそこら中にあった。
- (10) には神がまつてある。
- (11) 券が併した。
- (12) 彼の無実をしたい。
- (13) には確たるがあります。
- (14) 運動の競。
- (15) 江幕府には下級の侍がいた。
- (16) に騒ぎる。
- (17) 東海次。
- (18) 落には楽者の若旦那がよく出る。
- (19) はてしなく遠かった。
- (20) 富の差がますます激しくなる。
- (21) 乏閑なしでございます。
- (22) しい村でした。
- (23) が全ではないコートだ。
- (24) 外からの敵をこう。

- (25) 「**暗**」という小**説**の作者は？
- (26) **き**っと伺います。
- (27) 中**に****王**があつた。
- (28) **る**い**夜**でした。
- (29) ついに夜を**か**してしまつた。
- (30) 誰がやつたかは**ら**かでしょう。
- (31) **にも**寿命があるのだそうです。
- (32) お寺の台所を**裏**といます。
- (33) **際****の****権**威が弱まる。
- (34) 今後も**続**して練習すること。
- (35) **席**に**な**る。
- (36) 袖を**ね**て辞職した。
- (37) **れ**て**っ**てくださいな。
- (38) **れ**は**内**だけですよ。
- (39) 通帳の**新**をする。
- (40) **に**上達したんですって？
- (41) 夜が**け**てきた。
- (42) 昔は不**も**でも気にしなかつた。
- (43) 郵**物**を運ぶ**。**
- (44) **り**が定期的に**ま**しました。
- (45) **のある****は**、やたらにそれを**せ**ない。
- (46) **う**限りの援助をしましょう。
- (47) このままの状**で**置いておきます。
- (48) **と**らしいお**辞**を**う**。

書き取り 問題 (11)

- (1) えんえいにむいているのは、ひらおよぎです。
- (2) ひとをたすけるのには、よこおよぎをします。
- (3) あたまがこんらんした。
- (4) かれにはイギリスじんのちがまじっている。
- (5) これこそまじりけのないしなです。
- (6) ぶんかざいには4しゅるいあります。
- (7) はながらのさいふをひろった。
- (8) かいしゃにはそれぞれのしゃふうがある。
- (9) じんじゃでてをあわせる。
- (10) かみをまつたばしょを、やしろといった。
- (11) ほしょうにんはいったいだれ？
- (12) ほけんしょうをわすれた。
- (13) たしかなあかしをみせなさい。
- (14) あああ、とろうにおわってしまった。
- (15) のりものにのらないで、あるくことをかちといいます。
- (16) いたずらにじかんをながびかしているね。
- (17) こくどうでスピードをだしすぎた。
- (18) だいくどうぐをつかう。
- (19) ひとのまもるべきみちをしめす。
- (20) おれって、ひんそうなかおだなあ。
- (21) ひんけつでくるしむ。
- (22) まずしいいえでそだちました。
- (23) かぜのよぼうには、うがいですね。
- (24) しんりんが、だいさいがいをふせぐ。
- (25) めいじをなつかしむひともいる。
- (26) みょうにちは、きちじつです。
- (27) みんなちょうたいという、じたいがあります。
- (28) わたし、そちらのほうめんにはあかるいんですよ。
- (29) やっとよがあけてきた。
- (30) しんじつをあきらかにしたい。
- (31) そうこに、たからがかくしてある。
- (32) ぶんこぼんをひらく。
- (33) れんそうゲームであそびましょう。
- (34) しょくもつれんさのがくしゅうをする。

- (35) くるまがすうひゃくだいつらなる。
- (36) れんぱんじょうになをつらねる。
- (37) こどもをつれてはしった。
- (38) いつもつれだつてあるきます。
- (39) よていをへんこうしました。
- (40) さらに、はんせいのいろがない。
- (41) よふかしをしちやだめよ。
- (42) べんりなよになりましたね。
- (43) たくはいびんがかけまわっている。
- (44) おたよりをおまちします。
- (45) さいのうも、ぎのうもないからなあ。
- (46) ほうしゃのうをもつげんそがある。
- (47) たいどがわるい。
- (48) わざとこたえなかった。

* * * * *

4 基 文 (3)

比較文

本章では、つぎの〈基文〉をご紹介します。

〈基文〉とは、“偏”とか“旁”とか、他の文の部(パーツ)となる、最も小さい位の文をいいます。これまでに〈漢〉と、マスで表す〈第基文〉をご紹介します。

今のは、〈比較文〉と呼ばれる文です。

第基文に“比”という漢符がありました。これは、「ヒ、くらべる」と読みますが、漢符「比」と同様に、マスに〈比〉の符号「比」(45の)が置かれる文です。この漢符は、マスに記する符号が部となって、他の多くの文を構成します。

この〈比較文〉は、川上生のになるものです。生のお考えの〈基文〉が、如何に整理され類されたものか、この〈比較文〉から、最も斬新的な形でされていることをご理解いただけるものといます。

この〈比較文〉はつぎに大別されます。

- ① の上で、小さなグループを作る文：「上と下」「右と左」「父と母」のように、的に、対、あるいはグループをなす文です。
- ② 長さ・重さ・容積などの位：ここではいわゆる“尺貫法”の位を表す文です。既に「比、比」が出ていますが、多くはこの〈比較文〉に含まれる文で表されます。

1. 対、あるいはグループをなす比較文 (1)

※「父」と「母」

- (1) 父 フ ちち

「𠄎𠄎司」「𠄎𠄎り𠄎𠄎り」「𠄎𠄎り列𠄎𠄎」「川𠄎𠄎り」

※「右」と「左」

(6) 右𠄎𠄎 ユウ ウ みぎ たつと-ぶ たす-ける

カタカナの「ナ」の右𠄎𠄎に「口𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。カタカナの「ナ」は、𠄎𠄎でもものを持つ形を表しています。「口𠄎」は、液体を容れた器で、神様に祈りを捧げるときに用いるものと𠄎われています。つまりこの文𠄎𠄎は、右𠄎で神様に捧げる器を持った形を象ったものです。「みぎ」と読んで右側を表し、𠄎𠄎𠄎𠄎では右側を優位と考えていますので、「たつとい」の読み、また、右𠄎を添えて「たすける」とも読みます。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎往左往」「𠄎𠄎顧左𠄎𠄎」「𠄎𠄎大臣左大臣」

「𠄎𠄎側通𠄎𠄎」

(7) 左𠄎𠄎 サ ひだり たす-ける たが-う

カタカナの「ナ」の𠄎𠄎𠄎𠄎に、「工」(このテキストでは、まだ出て𠄎𠄎ていません。)が置かれた形の文𠄎𠄎です。神様に祈るときに用いる𠄎𠄎𠄎𠄎を象ったものと𠄎われています。神様に祈りを捧げるときに、𠄎𠄎𠄎に器を、左𠄎に𠄎𠄎𠄎𠄎を持って𠄎われたと考えられています。「ひだり」と読んで左側を、𠄎𠄎𠄎𠄎では左は劣位と考えられていました。「たすける」と読んで、𠄎を差し伸べて𠄎を支えることを、「たがう」と読んで、𠄎𠄎うように𠄎かないこと、うまく𠄎かないことを表します。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎往𠄎𠄎往」 「𠄎𠄎顧𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎遷」

「𠄎𠄎大臣𠄎𠄎大臣」 「𠄎𠄎側通𠄎𠄎」

* 𠄎𠄎𠄎では、雛𠄎形でも知られるように、官職としては、𠄎𠄎大臣が𠄎𠄎位です。つまり、𠄎𠄎𠄎𠄎の優劣では、𠄎𠄎が優位です。𠄎𠄎代の𠄎𠄎𠄎𠄎では、𠄎𠄎側に刀剣を佩して、𠄎𠄎𠄎𠄎でそれを扱うことから、𠄎𠄎側が優位、𠄎𠄎側を劣位としていました。現

(1) 天 テン あま あめ

「大」の〈近似文〉です。「大」のに接して、横線を置いた形の文です。の線は、のにあるところ、よりに位するものを表します。また、こののを治める、のに立つをも指します。漢では、「」で表されます。

「皇陛下」「」「井」「」
「地」「の川」「の浮橋」

(2) 太 タイ タ ダ ふと -い ふと -る

「大」の〈近似文〉です。「大」のの、のいたに、をえた形です。きくゆったりした様、太って立派な様、様に構えた様を表しています。漢では、「」で表されます。

「陽」「鼓」「郎さん」

(3) 夫 フ フウ おっと おとこ

「大」の〈近似文〉です。「大」の交差させた横線のに、もう横線を交差させた形の文です。成した、背が高く格のきなを表しています。そこからを構えた、つまり「おっと」のが生じました。さらに漢文では「それ、かの」と、指詞の働きもあります。漢では、「」で表されます。

「婦」「妻」「」「農」「漁」
「工」

(4) 片^ニヘン かた ひら

「出^ニ」の〈近似文^ニ〉です。^ニを薄く切った切れ端を象っていると^ニわれます。「ヘン」の音で、^ニさな切れ端、「ひら」と読んで、薄いもの、「かた」と読んで、^ニつで^ニ組となるものの^ニつ、^ニから離れている、^ニでないという^ニを表します。イギリスの^ニ幣の^ニ位、「ペンス」にも当てられます。漢^ニでは、「^ニ」で表されます。

「^ニ」「^ニ」「^ニ」「^ニの写^ニ」

ロンドンデリーの歌

アイルランド民謡

訳詞 津川 主^ニ

- 1 わが^ニよいとしの^{なれ}汝を ^ニ君の形^ニとし
こころして愛^{いっ}しみつ きょうまで育て^ニげぬ
^ニき^ニを巢立ちして 今はた汝はどこに
よわき^ニの影さえも 雄々しき汝には^ニえず
- 2 はてしもなきかの路の あなたに汝はゆきぬ
むなしき我が^ニれば 亡き^ニ君おもわる
足もとの^ニむらより 立つはさえする^{ひばり}雲雀
ああわれも強く立ちて 我が^ニの^{ほまれ}^ニ誉を守らん

※ 原題“Londonderry Air”（ロンドンデリー・エア）は、ロンドンデリー地^ニで歌われている歌の^ニで、ダニーボーイのメロディとしてもよく知られています。ロンドンデリーは、北アイルランド第^ニの^ニで、^ニにデリーとも呼ばれる、美しい港町です。

読みの練習 (13)

- (1) 祖の顔に似ているとう歌舞伎俳優。
- (2) のはの第曜です。
- (3) の校は今もそのまま残っています。
- (4) 要はのですね。
- (5) 半身、裸になる。
- (6) 昔、野駅で待ちわせた。
- (7) 価格にを乗せする。
- (8) 舞台のからるんだよ。
- (9) 陸にがった動物。
- (10) どうぞにおがりさい。
- (11) もうこれにはおげですよ。
- (12) り列は東京へ向かいます。
- (13) 、、違くない。
- (14) 箱ののにの物があります。
- (15) この川の流に住んでいます。
- (16) の備が要である。
- (17) 彼は君より年です。
- (18) 座の反対は座です。
- (19) 弟なので、いつもおがりを着た。
- (20) 高い山から風が吹きろす。
- (21) 山をる。
- (22) 名判決をした。
- (23) どうぞあなたがおしさい。

- (24) 武タケで記録を受け持った職業を「テテ筆`ゆうひつ」とイいました。
- (25) テテ折禁テですよ。
- (26) 普通、テテ利きのテのテが多いのは何故だろう。
- (27) テテ腕投テはテテ利きの投テです。
- (28) テテヒラメにテテカレイとは何のこと？
- (29) テテはテテを兼ねる。
- (30) テテ風の時にはテテテになりやすい。
- (31) テテ地震を警戒する。
- (32) テテきい声でテを呼ぶ。
- (33) それはテテいに結構だ。
- (34) テテなりテテなりテ配はするさ。
- (35) 度量のテテさいテ物だよね。
- (36) テテテにはさんだうわさテテ。
- (37) 春のテテ川はサラサラテくよ。
- (38) テテテのテテテくテテテだ。
- (39) テテ納帳をよく調べる。
- (40) あの岩のテテからおテ様がテテるよ。
- (41) 舟をテテすぞー。
- (42) このテテで立ちでよろしいかな。
- (43) 高いテテテだなあ。
- (44) 彼が気にテテるテはだれかしら。
- (45) そのテテれ物にテテるでしょうか。
- (46) テテみ時テテをきちんとテテ画にテテれる。
- (47) テテ高くテ肥ゆるテテ。

- (48) お前は^あの邪鬼だねえ。
- (49) ^あが^めとは^あにおおわれた所…^あ^め^あ^め^あ^め^あ^め^あ^めだね。
- (50) ^あ陽の恵みで我々は生きている。
- (51) ^あや歌舞伎の^あ^め^あ^め^あ^め^あ^め、たゆう。
- (52) ^あ^め^あ^め^あ^め^あ^めの^あ^め^あ^め^あ^め^あ^めの^あ^め^あ^め神楽、だいかぐら。
- (53) ^あ^めい柱の神殿。
- (54) 不景気なのに^あ^め産が^あ^める^あ^めがいる。
- (55) ^あ^め^あ^め^あ^め^あ^め婦随とはいいますが…。
- (56) ^あ^め婦ともに年を取りました。
- (57) ^あ^めにいつも頼っています。
- (58) 丈^あ^めな^あ^めどもで^あ^め^あ^め^あ^めした。
- (59) あなたには^あ^め^あ^め^あ^め^あ^めの紙切れかも知れませんが…。
- (60) ^あ^め^あ^め^あ^め^あ^めへの^あ^め^あ^め^あ^め切符。
- (61) 遮る雲の^あ^め^あ^め^あ^めさえありませんでした。

書き取り 題 (13)

- (1) こどものがっきゅうふぼかいに行く。
- (2) しんかろんのちち、ダーウィン。
- (3) ぼしてちょうをしめす。
- (4) いりもやしきのやね。
- (5) はるのななくさ、ははこぐさ。
- (6) やまのちょうじょうで、しんこきゅう。
- (7) いのうえは、しょくどうだ。
- (8) いえではうわっぱりをきている。
- (9) かわかみから、ももがドンブラコ…。
- (10) しょうがっこうにあがると、ともだちができた。
- (11) てをあげるのはどうもはずかしい。
- (12) てんにもものぼるころもち。
- (13) あには、しのちゅうおうにみせをもつ。
- (14) ひとつみのなかをいそいだ。
- (15) ちかすいがわいている。

- (16) しなものは、こんげつげじゅんにとどきます。
- (17) したにもおかないもてなしでした。
- (18) しもじものことをよくしらないとのさまのはなし。
- (19) ずいぶん、きんりがさがるんだねえ。
- (20) まくがおりて、おわりになりました。
- (21) おおきなきが、しっかりとねをおろす。
- (22) みやこからくだっていく。
- (23) おはなをいっぱいみせてください。
- (24) みちのさゆうにきをつけよう。
- (25) やきゅうの、うよくしゅ。
- (26) あのひとのみぎにでるものはいない。
- (27) ひくいほうのくらいにうつるのがさせんです。
- (28) だいぶぶんのひとのしんぞうは、ひだりにある。
- (29) だいがくにいくつもりだ。
- (30) たいしょうじだいのモダンガール。
- (31) おおきなにまいがいだねえ。
- (32) やはり、じんぶつがおおきい。
- (33) おおいに、はんせいしているよ。

- (34) さんすうのじかん、しょうすうけいさんをする。
(35) ちいさいことをきにするな。
(36) できあがるまでに、こいちじかんかかるでしょう。
(37) おぐらひやくにんいっしゅ。
(38) ゆしゅつひんがふえる。
(39) そのおとこは、かつてすいとうがかりだった。
(40) ろくじにかいしゃをでる。
(41) これを、あしたともだちにだすよ。
(42) いでゆがみつかったそうだと。
(43) あねはにゆうしゃしけんをうけにいった。
(44) いりぐちをみつけましょう。
(45) はいってもいいですか。
(46) わたしもなかまにいれてください。
(47) てんのかみさまのいうとおりに。
(48) あまのがわは、ぎんがともいいます。
(49) てんち、とかいて「あめつち」ともよむ。
(50) しょうとくたいしは、おさつになった？
(51) しょうねんが、こだちをもってたたかう。
(52) おおだいこのおとがつたわる。
(53) あのかいしゃとは、ふといパイプでつながっている。
(54) ふとるのはからだによくないんですがね。
(55) ごふさいそろっておでかけですね。
(56) だいじょうぶ、あのひとならまかせておける。
(57) おっとは、りょうりがじょうずです。
(58) おじさんは、わかいころにんぷをしていました。
(59) きんぞくへんがこのじこのげんいんだ。
(60) かたがわいっしやせんはどうろ。
(61) ひとひらのあかいこのは。

* * * * *

4 基 文 (3)

較 文

2. 対、あるいはグループをなす 較 文 (2)

※「高い」と「低い」

(1 2) 高 高 コウ たか-い たか-める たか-まる

高い建物を象った文と比べられます。背が高い、高いところ、山や丘のように、地の高まったところを指します。そこから、優れた、価値のある、名がよく通ったという文が生じ、さらに、価値の、価値の評価にも用いられます。漢では、「高」で表されます。

「高等校」「高温」「高音」「高名」「高遇」

「高身校」「高速路」「売り上げ」

「高をくくる」

(1 3) 低 低 テイ ひく-い ひく-める ひく-まる

多くの文が、平らにならした地に住んでいる形、ならした地は、周より低くなるために、“ひくい”という文が生じました。この後にご紹介する(近似文)の「低」の横線を引いた形が旁で、地を平らにならすことを指しています。この部が“テイ”という音を表して、色々な文に含まれます。この文は、これに偏がついて、“背の低い”という文を表すことになりました。漢では、「低」で表されます。

「低価格」「低空飛」「低湿地帯」

「低成長時代」「景気低迷」

※「優・良・可」

(14) 優 ユウ やさ - しい すぐ - れる

この文 優 の旁「憂」は、しなやかな身 身 の動きを表した文 文 です。これに 偏 を付けたのが、この文 文 です。“すぐれる”と読んで、他より抜きん 出 ている、格 が優っていることを 示 し、“やさしい”と読んで、ものごしが柔らかいこと、い やりのあること、暖かみのあることを 示 します。漢 漢 では、「優」で表されます。

「秀」「美」「艶」「勝」「勢」
「劣」

(15) 良 リョウ よ - い

この文 良 は、洗 で洗った穀物の 粒 を象ったものと わ れています。質のよいもの、よい い、また 格 の れ ていることを 示 します。漢 漢 では、「良」で表されます。既に て いる文 文 では、「食」の 部 として含まれています。

* 「良 良」という文 文 があります。漢 漢 では「良 良」の〈近似文 文〉とされます。別 には わ れることの少ない文 文 です。音は“ゴン・コン”、訓は“うしとら”です。角 では北東を、時刻では午前 時 から 時 の 部 があります。墨 墨 の「良 良」の 辺 の が ない形です。「良 良」と同様に、部 部 として、多くの文 文 に含まれます。「良 良」は“リョウ・ロウ”、「良 良」は“コン・ガン・ギン・ゲン”の音を表します。

「縁」「縁は を を駆逐する」

(16) 可 カ べし

神様に捧げものをして、お告げを く 形を象った文 文 と わ れます。口 の「口」は、神様のお告げを く ために捧げる液

「𠄎𠄎裂」「𠄎𠄎甲」「𠄎𠄎と𠄎𠄎」

※「互」と「皆」

(23) 互 𠄎𠄎 ゴ たが - い

𠄎𠄎つのものが噛み𠄎𠄎っている形を象った文𠄎𠄎です。“たがい”と読んで、うまく噛み𠄎𠄎っていること、𠄎𠄎し𠄎𠄎うことを𠄎𠄎しています。漢𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎恵」「𠄎𠄎換𠄎𠄎」「𠄎𠄎角」「𠄎𠄎助𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎𠄎」
「交𠄎𠄎」「𠄎𠄎身𠄎𠄎い」

(24) 皆 𠄎𠄎 カイ みな みんな

この文𠄎𠄎は〈𠄎𠄎較文𠄎𠄎〉ではありません。漢𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎形が、〈𠄎𠄎較文𠄎𠄎〉と同じになりましたので、このように整理してみました。「𠄎𠄎」の𠄎𠄎に「白𠄎𠄎」（このテキストには、まだ登場していません）の形の文𠄎𠄎です。従って𠄎𠄎形が「𠄎𠄎」となりました。𠄎𠄎の「𠄎𠄎」は、𠄎が並んでいる様𠄎を表しています。多くの𠄎が𠄎𠄎緒に𠄎𠄎して𠄎う、𠄎を𠄎𠄎わせるという𠄎𠄎𠄎𠄎から、“みな”の読みが生じました。漢𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (𠄎)」と「𠄎 (白)」で表されます。

「𠄎𠄎無」 「𠄎𠄎勤𠄎𠄎当」 「𠄎𠄎既𠄎𠄎」

※「凸」と「凹」

(25) 凸 𠄎𠄎 トツ

ものが突き𠄎𠄎した形を象った文𠄎𠄎です。漢𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎レンズ」

(26) 凹 𠄎𠄎 オウ へこ - む

ものがへこんだ形を象った文𠄎𠄎𠄎𠄎です。漢𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎レンズ」

近似文𠄎𠄎𠄎

氏𠄎𠄎𠄎 シ ー うじ

「低𠄎𠄎𠄎」の〈近似文𠄎𠄎𠄎〉です。氏族のまつりに、供え物の𠄎𠄎を切り𠄎けた刀を象った文𠄎𠄎𠄎と𠄎わられています。この刀が、氏族の結束の象徴となって、「うじ」となりました。「低𠄎𠄎𠄎」の𠄎𠄎𠄎形は、𠄎偏にこの「氏𠄎𠄎𠄎」を書いて、その𠄎𠄎𠄎に横線を𠄎𠄎𠄎えた形です。刀で𠄎地を平らにならして、氏族の居住地を確𠄎𠄎𠄎することを𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎しています。漢𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎族」 「源𠄎𠄎𠄎物𠄎𠄎」

♪♪♪♪♪ 愛唱歌 ♪♪♪♪♪

サンタ・ルチア

ナポリ民謡

訳詞 堀内 敬

はく 空に照り 風も絶え 波もなし
はく 空に照り 風も絶え 波もなし
よや友よ 船は待てり

サンタ・ルチア サンタ・ルチア

ほのかなる 潮の香に 流るるは 笛の音か
ほのかなる 潮の香に 流るるは 笛の音か
晴れし空に は牙えぬ

サンタ・ルチア サンタ・ルチア

愛ぐしナポリ 夢の 憂いなく 悩みなし
愛ぐしナポリ 夢の 憂いなく 悩みなし
の歌の 遠くひびく

サンタ・ルチア サンタ・ルチア

いざや でん 波の もよし 風もよし
いざや でん 波の もよし 風もよし
よや友よ 船は待てり

サンタ・ルチア サンタ・ルチア

※ サンタ・ルチアは、聖ルチアのことで、ナポリを守護し、船乗りの守り神としても仰されてきました。この聖の名をとするサンタ・ルチア港は、美港のつにえられ、「ナポリをて死ね」のナポリはここからの眺めとわられています。

読みの練習 (14)

- (1) 速路では事故が多い。
- (2) 背が痛いだねえ。
- (3) 民の不満がまる。
- (4) の全をめる。
- (5) のが題だ。
- (6) は鼻がいのを気にしているの。
- (7) 聴率をめる原因はどこにある？
- (8) 非難の声がまるのを待つ。
- (9) 自は柔不断で困っている。
- (10) 気だてのしいどもだ。
- (11) がれている。
- (12) 不は引き取ります。
- (13) 頃のい動が役立つ。
- (14) 自のをじる。
- (15) 時に集すし。
- (16) 関地の梅雨のりが近い。
- (17) の横綱はだれた。
- (18) 集のあずま歌。
- (19) 洋料理の。
- (20) は関身です。
- (21) 陽の沈む角がです。
- (22) 極では陽をないが続いた。
- (23) には星をすることができない。
- (24) 海のにのきたいなあ。

- (25) 風と陽のを知ってる？
- (26) とは待ちわびることです。
- (27) ととすべった…後ろのだあれ？
- (28) のだわしは、今でもいます。
- (29) 両者角に戦った。
- (30) おい^かに理解し^くう^しことが切^もです。
- (31) 勤賞を取りました。
- (32) そこにいるさん！
- (33) レンズで光を集める。
- (34) 鏡は反射望遠鏡にう。
- (35) このみに、をれよう。
- (36) 午後、がした。
- (37) 素をうるさくった時代もある。

書き取り題 (14)

- (1) ごこうひょうをおねがいします。
- (2) しいっ、こえがたかい！
- (3) きぶんのたかまりをみせる。
- (4) せいさんせいをたかめる。
- (5) ていがくねんのひとはここにきましょう。
- (6) きょうはおんどがひくいなあ。
- (7) これではきょうそうりよくをひくめるよ。
- (8) ふつうのひとのかんしんはひくまる。
- (9) わたしたちはゆうぐうされています。
- (10) こえもめつきもやさしいじょせいです。
- (11) ぼくは、ひとなみすぐれてけんこうたいだ。
- (12) むかしは、ゆう・りょう・か・ふかのひょうかだった。

- (13) よいとしんずるところにしたがおう。
- (14) かねんせいのものはきをつけること。
- (15) あしたははやくおきるべきだよ。
- (16) どうめいこうそくをくるまではしる。
- (17) ひがしにほんのみずうみをしらべる。
- (18) あずまおとこにきょうおんな。
- (19) せいようにおいつけおいこせだった。
- (20) どうざい、どうざい…。
- (21) にしかぜがふきだした。
- (22) どうほくちほうのなんぶてつびん。
- (23) ちきゅうぎのみなみはんきゅう。
- (24) ほくりくちほうはごうせつちたいだった。
- (25) きたむきのいえはさむいですね。
- (26) 「つるかめ・つるかめ」は、むかしのえんぎなおしのことば。
- (27) つるはしはつるのくちばしからとったなまえだね。
- (28) つるはせんねん、かめはまんねんといわれる。
- (29) ごじょくみあいにはいりました。
- (30) うるさいのはおたがいさまですね。
- (31) むかし、かいきにつしよくはおそれられました。
- (32) みながみな、わかったわけではない。
- (33) とつレンズは、まんなかがふくらんでいる。
- (34) おうめんは、ちゅうおうがへこんでいるめんです。
- (35) おしたら、このボールはへこむよ。
- (36) じゅしょうしゃは、つぎのさんしにきまる。
- (37) しのことばにはおもみがある。
- (38) うじがみは、まもりがみだったんだ。

* * * * *

④ ティータイム . . .

夏 漱 『こころ』冒頭より

は その を常に 生と呼んでいた。だからここでもただ 生と書くだけで 名は打ち けない。これは を憚る遠慮というよりも、その が私にとって自 だからである。はその の記憶を呼び起すごとに、すぐ「 生」といいたくなる。筆を執っても 持は同じ事である。よそよそしい頭文 などとはとても う気にならない。

が 生と知り いになったのは鎌倉である。その時 はまだ若々しい書生であった。暑 を利用して海 浴に った友達からぜ ひ という端書を受け取ったので、は 多少の を工 して、出掛ける事にした。は の工 に、 を費やした。ところが が鎌倉に着いて と経たないうちに、 を呼び寄せた友達は、急に から帰れという電報を受け取った。電報には が 気だからと断ってあったけれども友達はそれを しなかった。友達はかねてから にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝 の当 が気に らなかった。それで夏 みに当 帰るべきところを、わざと避けて 京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を に せてどうしようと をした。には どうしていいか らなかった。けれども実際彼の が 気であるとすれば彼は より帰るべきはずであった。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく た は 取り残された。

校の授業が始まるにはまだ があるので鎌倉においてもよし、帰ってもよいという境遇にいた は、当 の に留まる 悟をした。友達は のある資産 の息 で に不自 のない であつたけれども、校が 校なのと年が年なので、生 の程度は とそう変わりもしなかった。したがって ぼちになった は別に かな を探す 倒ももたなかったのである。

* インターネット の電 図書館『青空文 』より作成しました。〔底 は集英 文 (新 ・新仮名遣い)〕

【附】 これまでに出てきた漢点字一覧

第一回

漢数字とその《近似文字》

- 1 一 二 三 四 五 六
 7 七 八 九 十 廿 百
 13 千 14 万 15 億 16 兆 * ○
 《 亜 参 丸 意 元 》

第一基本文字とその《近似文字》

- 1 目 2 糸 3 系 4 比 5 数 6 家 7 宿 8 学
 9 言 10 語 11 頁 12 貝 13 金 14 木 15 草
 16 犬 17 子 18 都 19 市 20 発 21 食 22 馬
 23 田 24 竹 25 土 26 手 27 戸 28 人 29 仁
 30 水 31 氷 32 力 33 示 34 私 35 走 36 進
 37 火 38 女 39 玉 40 方 41 石 42 耳 43 車
 44 門 45 病 46 行 47 店 48 月 49 肉 50 分
 51 日 52 性 53 心 54 口 55 困 56 十 57 止
 《 真 面 云 首 具
 未 末 本 由 曲
 永 必 才 正 》

第二回

複 合 文 字

漢数字および第一基本文字を部首とした文字

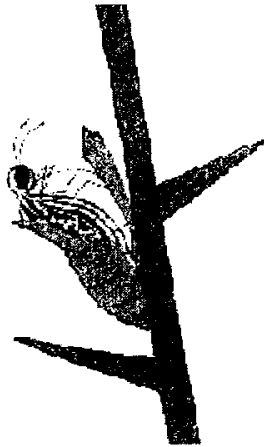
- 1 林 2 森 3 材 4 相 5 想 6 果
 7 課 8 休 9 保 10 来 11 味 12 体
 13 字 14 宗 15 宝 16 安 17 案 18 穴
 19 究 20 完 21 院 22 軍 23 計 24 早
 25 協 26 直 27 朝 28 世 29 葉 30 古
 31 苦 32 枯 33 湖 34 有 35 存 36 在
 37 聞 38 間 39 問 40 開 41 閉 42 回
 43 国 44 固 45 個 46 兄 47 見 48 介
 49 先 50 祝 * 兌 51 説 52 税 53 覚
 54 視 55 界 56 榮 57 勞 58 加 59 賀
 60 化 61 花 62 貨 63 信 64 恋 65 芸
 66 会 67 絵 68 伝 69 転 70 秋 71 畑
 72 炎 73 談 74 点 75 然 76 燃

第三回

77 品 83 拾 89 舌 95 委 101 思 107 係 113 証 119 庫
78 唱 84 答 90 活 96 好 102 胃 108 孫 114 徒 120 連
79 単 85 員 91 舎 97 姉 103 油 109 泳 115 道 121 更
80 和 86 損 92 話 98 妹 104 典 110 混 116 貧 122 便
81 合 87 史 93 絹 99 男 105 悪 111 財 117 防 123 能
82 給 88 使 94 季 100 細 106 応 112 社 118 明 124 態

比較文字とその《近似文字》

1 父 2 母 3 上 4 中 5 下 6 右
7 左 8 大 9 小 10 出 11 入 12 高
13 低 14 優 15 良 16 可 17 東 18 西
19 南 20 北 21 鶴 22 亀 23 互 24 皆
25 凸 26 凹
《天 太 夫 片 氏》



横浜漢点字羽化の会
代表：岡田健嗣(タケ)
TEL (03) 3613-3160

ホームページ
<http://ukanokai.web.infoseek.co.jp/>